

本居宣長記念館蔵『あさぎの袖』翻刻

中古文学演習Ⅰ受講生
中古自主ゼミ
(二〇〇二年度)

凡例

一、本稿は、本居宣長記念館蔵『あさぎの袖』を、杉戸清彬氏『少女巻抄注』をめぐるとする新資料——本居宣長記念館蔵『あさぎの袖』について(付、影印)——『文莫』第七号、一九八二・六、鈴木腹学会、『少女巻抄注』をめぐるとする新資料(続)——復刻『あさぎの袖』(承前)——(同第八号、一九八三・六)において紹介された影印をもとに、翻刻するものである。

二、『あさぎの袖』は、四種類の稿本からなる合綴本で、その他に書状等を含み、その構成は次の通りであるとされている(杉戸氏)。

- (一)『少女巻抄注』千村仲雄序写本
- (二)『少女巻抄注』本居大平端文自筆本
- (三)本居大平筆中山美石宛書付
- (四)鈴木腹差出本居大平宛書状
- (五)稿本『少女巻抄注』

(六)鈴木腹傍注少女巻抄出本

一、旧字体は新字体に改めた。

一、ひらがな・カタカナは原文のままとした。「二」「ハ」などは、原則として変体仮名と見なし、ひらがなに開いたが、前後がカタカナで書かれている場合はカタカナとした。

一、句読点、濁点は原文のままとした。

一、「メ」「レ」は、「シテ(して)」「トモ(とも)」に改めた。

(二)付箋は、田中大秀・中山美石・伊達千廣の三人のものであり、その区別は各項の末尾に(大秀・美石・千廣)として示した。

(三)抹消部は「」で示した。

(四)二行割注は「」で示し、原則として一行とした。

(五)説明を加える時は「」を使用した。

(六)句読点及び濁点は私に仮に付した。

(七)カタカナ・ひらがなは原文のままとした。但し、区別を示す係助詞の「ハ」等はその場に応じて適宜改めてある。

なお、見せ消ちは、転載にあたり、「遺」を用いて示す形式に改めた。

一、判読不能の文字は■で示した。

〈翻刻参加者〉

(四年)	中原 裕子	時田 麻子
大浜 佳子	堀 七恵	林 悠子
岡崎 愛	渡辺 陽子	洪 雪芳
奥村 愛	(二年)	水出 奈緒美
(三年)	市川 智子	柳澤 亜沙子
池上 彩子	井上 愛	渡邊 絵里奈
稲川 晴美	井上 里絵	(一年)
今井 美穂子	江田 久美子	大木 知子
高寺 絵美子	大口 枝里子	岡村 知子
竹野 美香	笹野 晶子	森田 理恵
多々納 優佳	高橋 彩子	
遠間 倫世	田中 麻央	

なお、未熟な私どもの翻刻をご快諾下さった鈴木腹学会ならびに本居宣長記念館に、厚くお礼申し上げる次第である。

一、改行は、原則として原文の通りとした。文字数の都合上、次の行に送らざるを得ない場合は、次の行頭を一字下げとし、「」を付した。ただし、傍注に関してはこの限りではない。

一、『鈴木腹傍注少女巻抄出本』(44才) (58才)などの傍注は、原典において、本文の左側や下に書き入れている箇所もあるが、すべて、それぞれが注を加える本文の右側とした。

一、圈点は、「大腹腹の」のように、圈点の直後の文字の右横に、「」を付して示した。

一、見せ消ちは、「て」のように、その文字の右横に「遺」を付して示した。文字の傍らに訂正文字が書き入れられている場合は、「お」や「」のように、「遺」の下に訂正文字を示した。ただし、訂正の文字数が多い場合などは、

博士才人
はかせさいしん

のように、「遺」の右に訂正文字を示したものもある。

一、見せ消ち以外の抹消部分は「」で示した。ただし、傍注については、原則として、抹消部分を示さなかった。

一、説明を加える際は、「」内に記した。

一、影印では判読し難い書き込みや付箋については、すでに「書入と付箋」として、杉戸氏による活字での紹介がある(『文莫』第八号)。今回、これを転載させていただいた。なお、本稿においても杉戸氏の紹介と同様、各丁ごとに、書き込みを①②…、付箋を付箋(一)付箋(二)…によって示した。

一、「書入と付箋」の翻刻については、杉戸氏によって次の方針が示されている。

(一)補入等の場合にはその位置を示す為、その前後の本文をも引用してある。また朱書の場合は「朱」と注記してこれを示した。

〈表紙〉

あさぎの袖
光源氏物語少女巻
夕霧若入学式抄注

《直書》

『少女巻抄注』千村仲雄序写本

〈1才〉《右下に「鈴屋之印」が押されている》

源語をとめの巻抄註序

〈1ウ〉

〈2才〉源氏の物語は言の葉のめでたくみやひやかなるは

さらにもいはす世の中にありとあることのあらはれたるもかくろへたるももさすかきあつめてとり

に物のあはれをつくしてふかく心をこめたるものに

なむよみもてゆくまにそのふみこととはにおほえす

ころもうつりてたその世にもありあふこちの

せられていはまくもかしこき雲の上の御あそびを

はしめたかきわたりの花鳥のみやひにつけていひ

思ひ給ふさえのほともおもひやらるはかりけ

さやかにあらはれていとしもめてたしくおもしろくよろ

あかぬことなきふみになむありけるかれば代々の物

しり人たちの心いれてときしるされたるちうさくとも

はた多かなる物から猶物語の下の心をもたとら

ことあるふしをも大らかに見過しなとして

たとくしけなる所々すくなからすなむありける

〈3才〉

を鈴屋翁の玉の小櫛もてそのかいなてのふし／＼むすほゝれたるをち／＼をときわけられてより物語のほいつくりぬしの心のいたりもあらはれてめてさもあはれなるもありしよりはこよなくたちまさりていと／＼ありかた／＼おむかしきわさになむありけるされとそはかきりもなき事なれば猶さとしもらされたることゝともありければそのをしへ子鈴木朗のおきなはやまともろこしのさえふかくとしころ何くれの書とも解あかせるか中に此物語をことによ／＼かむかへてかゝのときのこされたるすち／＼をもわきまへてさきにその補遺とて二巻をなむあらはされるそか中に処女の巻に夕霧のわか君大学の道に入たち給ふ時のそれか式てふことによりてはかせたちのいへるさまなどはかりあけつらひおかれるを猶かたそはなるかいとくちをしきわさなるへかめれば同じくはうひかうふりのほとん事光君のふかき御おきてのありかたきこゝろはへ大官のおほしなけき給ひし御真心などのさま今すこしこまやかにあらはやなど本居大平の翁のもとより物のついでにねんころにそゝのかしおこされけるまに／＼二たひ思ひ起してかき出し連ける此ふみなむそも／＼入学の礼てふ事はあかれかし世にてはたれもよくわきまへつらむを後の世となりては此巻に見えたるほかをさ／＼世にしられすなりきぬるをかくこまやかにわきまへられつればかくろへわたりしりのりともやう／＼あらはれゆくめる

〈3才〉

を鈴屋翁の玉の小櫛もてそのかいなてのふし／＼むすほゝれたるをち／＼をときわけられてより物語のほいつくりぬしの心のいたりもあらはれてめてさもあはれなるもありしよりはこよなくたちまさりていと／＼ありかた／＼おむかしきわさになむありけるされとそはかきりもなき事なれば猶さとしもらされたることゝともありければそのをしへ子鈴木朗のおきなはやまともろこしのさえふかくとしころ何くれの書とも解あかせるか中に此物語をことによ／＼かむかへてかゝのときのこされたるすち／＼をもわきまへてさきにその補遺とて二巻をなむあらはされるそか中に処女の巻に夕霧のわか君大学の道に入たち給ふ時のそれか式てふことによりてはかせたちのいへるさまなどはかりあけつらひおかれるを猶かたそはなるかいとくちをしきわさなるへかめれば同じくはうひかうふりのほとん事光君のふかき御おきてのありかたきこゝろはへ大官のおほしなけき給ひし御真心などのさま今すこしこまやかにあらはやなど本居大平の翁のもとより物のついでにねんころにそゝのかしおこされけるまに／＼二たひ思ひ起してかき出し連ける此ふみなむそも／＼入学の礼てふ事はあかれかし世にてはたれもよくわきまへつらむを後の世となりては此巻に見えたるほかをさ／＼世にしられすなりきぬるをかくこまやかにわきまへられつればかくろへわたりしりのりともやう／＼あらはれゆくめる

〈4才〉

めし合せてつひに源氏になし奉り給ふへくさため給ひぬかくていよ／＼道々のさえをならはせ給ふほとときはことにかしこくてた／＼うとはいはれとあたらしけれとふかく思ほしおきてさせ給ひぬることになんありけるこゝに此若君は故左大臣殿の北方かの帝の御一つきさいはらの妹官の御はらのた／＼ひとり又なくかしつき聞え給ふ御むすめ後にあふひのうへと聞えしかうみ給へる御子にていつ方につけても物あさやかなる帝の御孫よ父大臣おほしよるさまことにて御元服のはしめまつ浅みとりに品さたまり給へるなんいとほしく引たかへたる御こゝろつよさのほとその世にいとめつらかなることゝ大官大將をはしめ奉り大かたこの世人まてはえなく思ひきえてあはれかり聞えあへりける又大学の道に入らせ給ひてよるひるおこたりなくかつはくるしと父君をうらみなりなからまめやかに物せさせ給ひてつひにその御こゝろおきてのふかくかしこく仕への道に世人のうれふる身のなけきともをもしり大やけの御かためとなりて天の下をたすくる有徳の道をも学ひえ給へることいひもてゆけはのかしこき帝の大御心さしにもおのつからあひかなへることゝかた／＼ありかたきためしとにてかゝることを今さらいひつゝけたるかつはをこにきゝなざるゝ物から人の親の心のやみのさま／＼とあらはよからむかくあらむなと思ひまとふすちをしもよき人の思ひおきて給へるは今一きはことわりにめてたく世のをしへともたとられ

〈4ウ〉

こそいと／＼かしこくいそはしきわさにはありけれかくてこれか■をものせよと二人の翁のもよほさるゝにまかせてそのよしことわるになむかくいふは美濃の国人千村仲雄

『少女巻抄注』本居大平端文自筆本

〈5才〉

光源氏ときこゆるは桐つほのみかとのみこにて御母君は故あせちの大納言の御むすめなりき三つにて御はかまきのことありその年母御息所におくれ給ひ七つにて御ふみはしめさせ給ひぬ清らなること世にしらす御心はへはたたくひなくおおよすけてもておはするまゝにさとくかしこくおはしますなるを帝あまりにゆゝしきまてに

〈5ウ〉

ひつゝけはこと／＼しくはなりぬへきよろつにおもほしかしつき給ふことかきりなしそのかみ思ほしめくらすにわが御世のほとこそあれ外戚のよせなき人無品親王のたゝよはしきにてあらむよりはたゝうとゝなりつかさ位高くおほやけの御うしろみをする人にてをあらましかはゆく末たのもしからましと思ほしよるとはすれとたやすくしもさためかねさせ給ひてかしこき相人にみせ奉らしめ宿曜師のよく考ふるにもかんかへさせその心々をもきこし

〈6才〉

ぬへきみち引ならむかしと思ひよりてひかくしく此書の端文とはしるしそふるになん
本居大平

稿本『少女巻抄注』
〈8才〉

《本居大平筆中山美石宛書付け(貼付)》

付箋(一)

付箋(二)

付箋(三)

源氏
物語 少女巻抄註 全

〈8ウ〉
〈9才〉

《鈴木服差出本居大平宛書状(貼付)》

源氏物語をとめの巻の内夕霧君の御入学寮試の事を書たる所に思よりたる事とものあるをいはむとてまつ湖月抄の文を大かた書とりて其中にわろくふようなる事ともは皆はふきてさて師の玉小櫛とおのか今案とをば書いれて此一巻になん物しつるこは藤の垣内の本居大平主のすゝめによりてなり

文政七年 甲申 十一月

はなれ屋
鈴木のみき

〈7ウ〉

はなれ屋
鈴木のみき

〔14才〕

〔14才〕

をしり侍らす。夜昼御前に候ひて。わづかに
なんふみなどもならひ侍し。たゞかしこき御手
より伝へ侍りしに。何事も広き心をしらぬ程は
文才をまねぶにも。琴笛のしらべにも。ねたら
ず。およびぬ所の多くなん侍りける

①

御手より。琴笛をこめたる詞なり。伝え
侍りしに。だにはサへにてかしこき御手よりと
いふにあたりたる詞。上のたゞは上の世中を
しり侍らずにつぎたる詞也。何事も広き
心。すなはち上の世中の有様也。ねたらず
は。琴笛の及ばぬ所は文才なり

〔14才〕
はかなき親にかしこき子のまさるためしは。いと
かたき事になん侍れば。ましてつぎ／＼伝はりつゝ。
へだ／＼行んほどの行さき。いとうしろめたきに

よりなん。思ふ。給へおきて侍る

はかなき親云々とは。源氏君 御みづからと。夕
霧君との御事をあてゝたとへの給ひ

まして云々は御子孫の末々をおぼす御意

也。賢子も愚父に及ぶことはかたきことわ

り也。へだ／＼行とは智慧のほどのおと

り行也。いとうしろめたきにうしろめた

きは。後目痛にて。心モトナク案ジラルゝナリ

〔15才〕

〔15才〕

玉小櫛に。後やすきの反也俗言にキヅカヒニ思ハ

〔15才〕

〔15才〕

「ル」
といふ事也。とあり。思ふ給へおきて侍る
カヤウニ存ジヨリトリキメマシタ。六位にして大学
寮に入れ給ふ事也。さて是より暫くなべ
ての世中の御論なり。見る人深く意を
とめて味ふへし

〔15才〕

〔15才〕

ぬれば。時にしたがふ世の中の。したにははなまじろき
あそびをこのみて。心のまゝなる官爵にのぼり
めましろき河花弄本皆同
「をし」
つ。追しようし。けしき取つゝしたかふほどは。おの

から人とおぼえてやむことなきやうなれと。時うつ
りさるべき人に立おくれて。世おとろふる末には。人に
かるめあなづるるゝに。かゝり所なき事になん侍る。

猶ざえをもとゝしてこそ。やまと魂の世に用ひらるゝ
方をもつよう侍らめ。

世中さかりに。家富み身榮ゆるを云。おごり
ならひぬれば。驕。奢。の二つに身も心も持つ

くる也。いと遠くおぼゆもてはなれたる事

今ではかゝしからずながらもかくてはぐくみ

侍らば。せまりたる大学のしうとて笑ひあなつる

人もよも侍らじ。と思ふ給ふるなど。きこえしら

せ給へば

さしあたりては心もとなき。当分六位デハ不足

ナヤウニゴザリマスレドモなり。つひの世のおも

しと。夕霧を終には政道輔佐の大臣にな

さん思召なるよし也。侍らずなりなん後

もワタクシ相果マシタ跡モ也。うしろやすか

るべき上のうしろめたきの反也。せまり

たる大学の衆。河うつほの物語にも此語あり

花せまるは困窮也。腹云大学生は困窮者

多かりし故に当時かゝる詞ありしなるべし

と思ふ給ふる。ともじの下に。なんといふこと

脱たるべし上の云々によりなんをうけたる

欺。とも思へど。かれは下にふくみたる終意

ありて。ここへはつづかざるへし

大宮也。師御心ゆかぬさま也。イカサマ。大宮詞

打なげき給て。げにかくもおぼしやるべかりけるを。

我御子也。ヒツチカヘテヒツタ事

此大将なども。あまり引たがへたる御ことなりとかた

むき侍めるを。このをさなごゝちにも。いと口をしく。

大将左衛門督の子どもなどを我よりは下臆と

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

〔18才〕

おもひおとしたりしたに。皆おの／＼^{かかい}加階^{かかい}のほりつゝおよすけあへるに。あさぎをいとからしと思はれたるが。心ぐるしう侍るなり。と聞え給へば 付箋(一)

② およすけあへるに 本は小児の人となり。おとなしくなるをいふ言なるを。こゝにては官位の昇りて身がらのよくなるをいふなり。さて

此下にとていふ言おちたるべし。上の大将左衛門督云々より是まで夕霧のおぼし

のたまふ事を大宮の語り給ふなれば也

打笑ひ給て。いとおよすけても恨侍るなりな。いとかなしや。この人の程よとて。いとうつくしとおぼしたり。学問などして。すこし物の心もえ侍らば。そのうらみはおのづからとけ侍りなん。ときえ給

①

いとおよすけても イツカドオトナブリタル申シ事カナと也もは俗にモオといひ。マアといふに同じ

いとはかなしや此人のほどよ ほどは年頃なりおとなぶりは怨みたれど。まだをさなくて心の浅はかなる事よと也 いとうつくし

イツソカハユラシイ源の御詞の中に草子地を挟みて打笑ひ給へる御意をことわれり。人 付箋(一)

の親の心げにさもありぬべし学問などして云々此度源のおぼしよられたる筋は。もはらもろこしのふみの教えに。より／＼見えたる趣を用ひ給へる故にかくの給へり

〈19才〉

などとは学問をもし。年もたけたらんにはとなり 付箋(一)

あさなつく 河礼記云已冠而字。人之道也。細字なり。儒者になるとは必あること也。文章院にて。当監と云ものが

① 簡に書つくる也。文屋康秀を古今の序に。文琳とうけるもあさな也。此類也花学生の入学の時。文章院の堂。監が書くだす 名簿に字を書也。聖廟御字は

〈20才〉

菅三善清行のあさなは三耀といへり。夕霧の字も源なにと有へき也。師日本の字の事。

漢家に用ゆるとは異に侍也。服云此説の如くから国にての字の主意は。成人を尊みて同輩以下より実名を呼ぶことを憚るためなるを。此にても其意なりながらかつは漢文から歌にからめきて聞ゆる料として。それも表立たる上表などには。たえて用ゆることなければ。詞の意も。あさるのあざと同意なるへし いぶかしき事 此詞のゆかしき

〈20ウ〉

意になる故は。見ず知らずして心もとなき事を。たしかにしりて心を晴さまほし

き意也 中々かへりて也。かくたま／＼時めきたるにつけて。心おごりもすべき事なるに中々。となり

はゞかる所なく。例あらむにまかせて。なだむる事なくきびしう行へ。とおほせ給へば

〈付箋(一)〉

細源の御子なりとて。心おきてはゞかる事もなく。限ある法式のごとくに事を行ふべきよしを下知し給ふなり 此字つ

〈21才〉

くる事。上の御元服と。下の入学との間に有て。上下に意かよへる事あり。もろこしの

古札に。冠して字つけ成人の道を 責といふことありて。ことに入学せんとし給ふ生がねの事なれば。字をつくる博士。やがて

もろこしの烏帽子親めきて。あらたに元服の作法だちて。何くれと物するしわざの有しなるべし。大方は学中にて行ふ事なるを。其作法のまゝに東の院にて

し給へるなるべし 令云凡学生在^ニ学^ニ各以^ニ長幼^ニ為^ニ序^ニ初入^ニ学^ニ皆行^ニ束脩^ニ之^ニ礼^ニ於^ニ其^ニ師^ニ各布^ニ一端^ニとあるこれもろこしの古札をうつされたる物にて。学中にては

〈21ウ〉

貴賤にかゝはらず。齒と徳とをもつて 付箋(一)とすといふ定なり。各といひ。皆といへるは。道々の学ある故に。師も。朋輩も又みな一つにあらざる故なるへし 礼記云行^ニ一物^ニ

〈22才〉

而三善皆得焉者唯世子而已其齒ニ于学ニ之謂也 故世子齒ニ于学ニ國人觀之而曰而將^ニ君^ニ我^ニ而與^ニ我齒^ニ讓者何也曰有^ニ君^ニ在^ニ則^ニ礼^ニ然^ニ然^ニ而衆^ニ知^ニ父子之道^ニ矣

有^ニ父^ニ在^ニ則^ニ礼^ニ然^ニ然^ニ而衆^ニ知^ニ父子之道^ニ矣 曰長^ニレ長^ニ也然^ニ而衆^ニ知^ニ長幼之節^ニ矣といへる趣也。されば東の院にてし給ひても。猶学中の礼を行ひし事と見えたり。ここに上達部殿上人。珍らしくいふかしき事にして云々といひ。憚る所なく礼あらむにまかせて云々とあるをはしめ。下にくさくさめづらしき事にかたりなせる。皆この筋なり。そのかみ学寮にては常ある事なるべけれど。大臣

〈22ウ〉

の家の子などのさる事は。すでにたえてし給ふ事のなくなれる世にして。さてなん珍しくいぶかしき事にしてとはいへるなるべき。此事絶て久しくなりぬる後。外に又書しるしたる物もなければにや。古来の註ども此段の意を得ずして。皆とき誤られたり師の玉小櫛にも心つかれさりしとみえたり

しひてつれなく思ひなして

應しながらもしひてさあらぬかほして。

〈23才〉

〈付箋(二)〉

家より外にもとめたるさうぞくどもの。打あはずかたくなしき姿などをものはちなく。孟儒者は貧窮なるものなれば也 服云人

〈付箋(一)〉

にかりぬる装束なれば。ユキタケソロハズなど
してフツガウなる也
おもゝちこわづかひ。うべくしくもてなしつゝ
俗にシカツベラシウといふがことし
座につきならびたる作法よりはじめ。見もしら
ぬ様どもなり

〔23ウ〕

賤しき博士ども。年齢の順に上座になみ
ゐて夕霧の君を下座につけたるなどなる
へし下の寮試の段にも此事見えたり
大平主云道々しき教事を下に含めて。
所々にをこなる事をとりませて興し
いへる。これ又作り主の例の思慮ありての
事也。さて下に上達部殿上人などの
をこに見給ふといひなすも。皆そのころ
しらひなり

〔24才〕

わかき君達はえたへず。ほゝるまれぬ。さるは

付箋(一)

物わらひなどすましく。すぐしつゝしつまれる
限をとえりいだし

付箋(二)

本よりをかしかりぬへき事をしり
給へはなり。すぐしつゝ細年よりたる
人をいふ也。腹云わかきほとをすぐしたる
をいふべし。必年老たるにかがら

へいじなどもとらせ給へれど

付箋(三)

〔24ウ〕

貴客に瓶子をとりて酌をせさせるは。
博士を上客として形の如く敬ひ給ふ
作法也。花鮎子にて酌をとるは。近代の
事也。今も節会の時は。瓶子にてとる也
筋ことなりけるまじらひにて。右大将民部卿
などの。おほな／＼かはらけとり給へるを。あさ
ましうとがめ出つゝおろす

付箋(一)

〔25才〕

右大将若君の御伯父也。民部卿細
系図なき人也。諸抄同。腹云これも御伯父の
殿原の一人ならんか。おほな／＼俗に
随分といふが如し。ズキブン御キドクニオ勤
ナサレル御ツモリなれども全体甚案外な
る事故に。自然と侮りがましき意はへ
の見ゆればにや。興がサメ肝ノツブレル位二と
がめ出ておろすなり。おろすは貶すに同
しく無礼を。シカルなり

付箋(二)

おほしかりもとあるしはなはたひざうに侍り
たうぶ。かくばかりのしるしとある何某を
しらずしてやおほやけにはつかうまつり給
甚をこなり
是みな其ことはつきの常ならぬをまね
びて興したる也。おほし。大平主云
凡也。雅語に常には大方又すべてなど

〔25ウ〕

いふに同じく俗に云惣体なり。垣下
あるじ。師弄花に大饗などにも人数の
外の人の交りたるを垣下の公達といふ。
あるじは饗也。腹云此あるじを饗と解る
は。非なるべし。こは例の儒者詞にて。
かいもとあるし。とつゞけて。漢籍に衆主
人。とある意なるべし。客ながら主方
にて。今俗に取り持の衆といふものなり。
さるによりておのれは。民部卿をも御伯父
の殿原ならむといへりしなり。はなはだ
は古語にて。この頃は常いはぬ詞なるを。

〔26才〕

大学の衆は漢籍よみに口なれて。かく
いふがをかしき也。ひざうは非常にて俗
に法外又ブサハフといふが如し。たうぶ
は給ふ也。侍りたうぶも。きゝなれずをこ
しき。也。かくばかりのしるしとあるとは今日
の賓師と聞え用らるゝをいふ。何某は
その名をのれる也。しらずしてやおほ
やけに云々ソナ事デゴ勤役ガナリマスカ
をこなりはピロウ也

〔26ウ〕

などいふに人々みなほころびて笑ひぬれば
ほころびては俗にいふ吹出なり。もとより

〔27才〕

付箋(一)

①

〔27ウ〕

甚ひざうなり。座をひきて立たうびなむ
立侍りなんといふべきを。かくいふもをかし
き也。たうびは。給はりの約りたびを
のべたるか。又は給はせのつゞまり給へ
をたうべともいふを。よこなまれるにや
などおどしいふもいとをかし
おち給ふへくもあらぬ事もおどすが
をかしきなり
見ならひ給はぬ人々には。めづらしくきようあり
と思ひ
入学を経給はざりし人々なり
抄。儒業より立身の公卿也
此道より出立給へる上達部などは。したりが
ほに打ほゝるみつゝ
我をその事をへて。よく知居給へは也

付箋(二)

付箋(一)

かゝる方ざまをおぼし好みて。心ざし給ふがめで
たき事と。限なく思きこえ給へり
(28才)

かゝる方さまとは此日の作法を主として
此たひ若君を大学にいれ給ふ事をも
含めいふ也貴人の情にあはす絶てし
給はぬ事を奇特にも好み心さし給ふ
事よと限なく感し奉り給也 ①
博士の制する也
いさゝか物いふをもせいす。なめげなりとても
とがむ

②朗云から国の定めに本づきて。今一きはきびし
く定めあへりけん。古の大学寮の風儀
作法。此物語の世になかりせば。今の世何に
よりてかは思ひやりはかりし事を得ん「や」。

後の世にしては。古物語の学問に益ある事
の多き事。この一つにても思ひ知べし
ヤカマシウ
かしましうのしりをるかほとも。夜に入ては
中々いますこしけちえんなる火陰に。さるがう
がましく。わびしげに人わろげなるなど。さま
に。げにいとなべてならず。様ことなるわざなりけり。
③本 ④影
人むろさま也
大学寮の者とも也
大学寮の作法をさしていふ也
さるがうがましく河この作法が。物まね
などのやうなるこちする也 弄猿楽はふ
るくもありきとかや。物のまねをして。心に
思ひ入らぬ事をもふるまひいふ物也。大学の
衆源氏の仰に随て。事きびしく行ふ
にたとへたる也 朗云さるがうは今世の能の

付箋(一)
(29才)

①
事はてゝまかつる博士才人どもめして。又々ふみつく
らせ給ふ。上達部殿上人も。さるべきかぎりをば
みなとゞめさふらはせ給ふ。はかせの人々は四あ
たゞの人はおとゝをはしめ奉りてせくつくり
給ふ
たゞの人とは。博士ならぬ人々をいふ
興ある題のもじりて。文章博士奉る
花翰林の人出題する也。韻の字は切韻
とて。何字を以て韻とすといふ時もあり。又
題の中取れ韻といひて。題の五文字の中
平 声 の字を取て韻とする事もあり。
又何の韻にても。作者の心まかせにとる
事もある也
短き頃の夜なれば。明はてゝぞ講する。左中弁
かうじつかうまつる
細系図の外の人文章生より昇進の
人なるべし 朗云大将別腹の兄弟也
かたちいときよげなる人の。こわづかひ物々しく。
神さびて読あげたるほど。いとおもしろし
物々しはモツタイガアル也 神さびて今な
らばカラメイテといふほどの事也
おぼえ心ことなる博士なりけり
世のオモハクモ其人の心ばえもともにカクベツ
すぐれたる也

狂言師といふ者のしわざぞ。その遺風な
るべき わびしげ 貧乏ラシイ也 人
わろげやつれてミグルシイ也 さまぐに
さるがうがましきと。わびしげに人わろげなる
と。此二つのさまどもものさまぐなるをいふ
げにナルホド也人々の珍しさをかしく
思しめしたるはことわりとなり
御調也
おとゞはいとあざれかたくななる身にて。けうさうし
まどはされなん。との給ひて。みすの内にかくれてぞ
御らんじける。
けうさうは。きやうさうにて。警策なら
んか。警はいましむる也。策は馬にむち打
か如くする也。我等がやうなるイツソジダ
ラクデ。キツトシタ事ハエセズ。フツガフナ者ハ
キヤウサウシ マドハサレン
制止折檻ニアウテ迷惑スルテアロ。とたは
ふれにのたまひて御簾にかくれて覽
給ふ也
孟 著座の衆の敷也
数さたまれる座につきあまりて。かへりまかんづる
大学のしうどもあるを聞しめして。釣殿のかた
心みえたり
にめしとゞめて。ことに物など給はせけり
物とは。禄。又は飲食物などなるべし。
おとゞの万にゆきわたり給へる御心を
いへるなり

付箋(一)

(30才)

たはふれ給ふへき御身をもて
是より詩人どもの時に作れる心を述たる也
窓の螢をむつび。枝の雪をならし給ふ。志の
すぐれたる様を
もろこし晋の車胤は。家貧しくて油の
かはりに螢をあつめて書を照し。孫康は
雪に映して読書故事あるにより書
よむに心をつくす事を。螢雪の功など
いふことあり。窓のといひ。枝のといへるは。文章
のあやにそへたるなり ①
万の事によそへなずらへて。心々につくりあつめた
る句ごとに面白く。もろこしにももてわたり。
つたへまほしげなる世のふみどもなりとなん。
そのころ世にめでゆすりける
カラウタ
詩の本つ国たる。もろこし人にも見せま
ほしといふに。そのすぐれたる事知るゝ也
おとゞの御はさらなり。親めきあはれなる事
さへすぐれたるを。涙おとしてずじさわぎし
かど。女のえしらぬことまねぶは。にくき事をと
うたてあればもらしつ
あはれ子を思しめす親心の。哀に感嘆
すべき事マデガ詩の辞のすぐれたる外
にすぐれたる也 にくき事をスカヌモノ
ヂヤニ うたてあればヒヨンナモノニナル故にと

(31才)

かゝる高き家に生れ給て。世界の栄花にのみ
たはふれ給ふへき御身をもて
是より詩人どもの時に作れる心を述たる也
窓の螢をむつび。枝の雪をならし給ふ。志の
すぐれたる様を
もろこし晋の車胤は。家貧しくて油の
かはりに螢をあつめて書を照し。孫康は
雪に映して読書故事あるにより書
よむに心をつくす事を。螢雪の功など
いふことあり。窓のといひ。枝のといへるは。文章
のあやにそへたるなり ①
万の事によそへなずらへて。心々につくりあつめた
る句ごとに面白く。もろこしにももてわたり。
つたへまほしげなる世のふみどもなりとなん。
そのころ世にめでゆすりける
カラウタ
詩の本つ国たる。もろこし人にも見せま
ほしといふに。そのすぐれたる事知るゝ也
おとゞの御はさらなり。親めきあはれなる事
さへすぐれたるを。涙おとしてずじさわぎし
かど。女のえしらぬことまねぶは。にくき事をと
うたてあればもらしつ
あはれ子を思しめす親心の。哀に感嘆
すべき事マデガ詩の辞のすぐれたる外
にすぐれたる也 にくき事をスカヌモノ
ヂヤニ うたてあればヒヨンナモノニナル故にと

(32才)

かゝる高き家に生れ給て。世界の栄花にのみ
たはふれ給ふへき御身をもて
是より詩人どもの時に作れる心を述たる也
窓の螢をむつび。枝の雪をならし給ふ。志の
すぐれたる様を
もろこし晋の車胤は。家貧しくて油の
かはりに螢をあつめて書を照し。孫康は
雪に映して読書故事あるにより書
よむに心をつくす事を。螢雪の功など
いふことあり。窓のといひ。枝のといへるは。文章
のあやにそへたるなり ①
万の事によそへなずらへて。心々につくりあつめた
る句ごとに面白く。もろこしにももてわたり。
つたへまほしげなる世のふみどもなりとなん。
そのころ世にめでゆすりける
カラウタ
詩の本つ国たる。もろこし人にも見せま
ほしといふに。そのすぐれたる事知るゝ也
おとゞの御はさらなり。親めきあはれなる事
さへすぐれたるを。涙おとしてずじさわぎし
かど。女のえしらぬことまねぶは。にくき事をと
うたてあればもらしつ
あはれ子を思しめす親心の。哀に感嘆
すべき事マデガ詩の辞のすぐれたる外
にすぐれたる也 にくき事をスカヌモノ
ヂヤニ うたてあればヒヨンナモノニナル故にと

付箋(一)

(32才)

かゝる高き家に生れ給て。世界の栄花にのみ
たはふれ給ふへき御身をもて
是より詩人どもの時に作れる心を述たる也
窓の螢をむつび。枝の雪をならし給ふ。志の
すぐれたる様を
もろこし晋の車胤は。家貧しくて油の
かはりに螢をあつめて書を照し。孫康は
雪に映して読書故事あるにより書
よむに心をつくす事を。螢雪の功など
いふことあり。窓のといひ。枝のといへるは。文章
のあやにそへたるなり ①
万の事によそへなずらへて。心々につくりあつめた
る句ごとに面白く。もろこしにももてわたり。
つたへまほしげなる世のふみどもなりとなん。
そのころ世にめでゆすりける
カラウタ
詩の本つ国たる。もろこし人にも見せま
ほしといふに。そのすぐれたる事知るゝ也
おとゞの御はさらなり。親めきあはれなる事
さへすぐれたるを。涙おとしてずじさわぎし
かど。女のえしらぬことまねぶは。にくき事をと
うたてあればもらしつ
あはれ子を思しめす親心の。哀に感嘆
すべき事マデガ詩の辞のすぐれたる外
にすぐれたる也 にくき事をスカヌモノ
ヂヤニ うたてあればヒヨンナモノニナル故にと

(31才)

かゝる高き家に生れ給て。世界の栄花にのみ
たはふれ給ふへき御身をもて
是より詩人どもの時に作れる心を述たる也
窓の螢をむつび。枝の雪をならし給ふ。志の
すぐれたる様を
もろこし晋の車胤は。家貧しくて油の
かはりに螢をあつめて書を照し。孫康は
雪に映して読書故事あるにより書
よむに心をつくす事を。螢雪の功など
いふことあり。窓のといひ。枝のといへるは。文章
のあやにそへたるなり ①
万の事によそへなずらへて。心々につくりあつめた
る句ごとに面白く。もろこしにももてわたり。
つたへまほしげなる世のふみどもなりとなん。
そのころ世にめでゆすりける
カラウタ
詩の本つ国たる。もろこし人にも見せま
ほしといふに。そのすぐれたる事知るゝ也
おとゞの御はさらなり。親めきあはれなる事
さへすぐれたるを。涙おとしてずじさわぎし
かど。女のえしらぬことまねぶは。にくき事をと
うたてあればもらしつ
あはれ子を思しめす親心の。哀に感嘆
すべき事マデガ詩の辞のすぐれたる外
にすぐれたる也 にくき事をスカヌモノ
ヂヤニ うたてあればヒヨンナモノニナル故にと

〔33才〕

也まことには歌物語の書に詩文を書ける例もなくつきしからねば也
太宰の道に入給ふ作法也
打つゞき入学といふ事せさせ給て

花令ニ曰凡學生在學各以長幼為序
初入學皆行束脩之礼於其師各布一端
孟論語にいふ束脩之礼とは一束の修脯
を持て御弟子に参らむと云心也河二世の
源氏歴レ儒例 源伊行 從二位民部大輔兼明
親王男花院侍從

同俊賢 正二位大納言民部卿
左大臣兼左近衛少輔 俊賢卿例尤叶今例ニ
欺此入学の儀式。又字つくるに同く。珍ら
しき事あるべけれど。上の段にゆづりて
略き。又下のにこゝにても又。おろしの
する者とも有て。といふを以て思ひやらせ
たるなるへし

〔33ウ〕 二条院の東院に局を作て也
やがて此院の内に御ざうし作りてまめやかに
さえふかき師にあづけ給ひてぞ學問せさせ奉り
給ける

まめやかトクジツ さえふかき師 學問ノテ
アツイ師匠。此師は大内記といふ人なるよし
下にみゆ

〔付箋一〕

大宮の御もとにも。をさくまうで給はず。夜
昼うつくしみて。 アマリイカウ(ヌ)也
トカクヤハリ也 チサイニ也 猶ちこのやうにのみもてなし
聞え給へれば。かしこにてはえ物ならひ給はじ
とて。静なる所にこめたてまつり給へるなりけり
此けり。物をことわりたる意のてには

源氏の夕霧を也
今はれうしうけさせんとて

今ハモハヤ。細大学寮にての試也 史記を
よましめて。難義を問て儒士を試る事也。
花史記の難義をとふに。五条の中に三条
に通するを及第とす。擬文章 生に補

〔35ウ〕

まづわが御まへにて心見せさせ給。例の大將。左
大弁。式部大輔。左中弁などばかりして。御師の
大内記をめして。史記のかたきまきく寮試
うけん博士のかへさふべきふしを引いで

〔36才〕

かへさふはかへすに同じ。推返して詰り問へ
きふしう也 細左大弁以下三人。系図に
見えたる也。師みな儒家より出て任する
官ども也 腹云左中弁は大将別腹の兄弟
なるよし。此巻にみえたり。余の二人もさ
ならむか。よしさらずとも内縁ある人々なるべし
一わたりよませ奉りたまふに
たゞよませ給ふのみならず。義理をも説せ給
をいふべし。近き世にも書をとくを物よみと
いふ詞あるがことし
いたらぬくまなく。方々にかよはし読給へるさま
いたらぬくまなくスミカラスミマデ流通シテ也
方々にかよはし云々 同書内の外々の文
言をも証拠に引出給ふを云

〔34才〕

① にて。上のをさくまうで給はずまでの。ゆゑ
よしをことわりたる詞のとめ也。

月に三たびばかりをまゐり給へ。とぞゆるし聞え
給ひける。つとこもり居給ていぶせきまゝに。殿を
つらくもおはしますかな。かく苦しからでも高
き位に昇り。世に用ひらるゝ人はなくやはある。
と思ひ聞え給へど。大方の人がらまめやかに。あだ
めきたる所なくおはすれば。いとよく念じて。
いかでさるべきふみどもとくよみはて。まじら

〔34ウ〕 世にも出たらむと思ひて。たゞ四五月
のうちに。史記などいふ書は読はて給てけり。
① 大方のゼンタイノ。まめやかにジツテイデ。

あだめきたる所なくウハキガツタキブンガ
なく也。ねんじてシンボウシテ。世にも

〔付箋一〕

出たらむセケンヘモ出てあらむ也。又思ふに。
出立んの写し誤りなるべき歟。此君君の
父君を怨み給ふ心ばへ。上のあさぎを
いとからしと云々の段と見合すへし。さて
かく怨みながらも。いとよく念じて勤め
学び給ふとかけるに。いと此君の性質の
すぐれてまめやかなる所みえて。をさな心のほどの
いとあはれにて。涙おちぬへし。太平主云。古事記。
景行天皇の段。倭建命。東夷をこと向給ふ
所の。師の伝口の論の趣。見合すべし。これに似
たる事あり

〔35才〕

つまじるしのこらず

〔36ウ〕 試み問給ふへき所々に。つけおき給ふ爪印
のかぎり。のこらずよみ説給ふ也

① あさましきまで有がたければ

キヨウガサメキノツブレルホトニ御奇特ニ奇妙ナ
「と也」
さるべきにこそおはしけれと

④ 仏説の宿縁。又は宿習といふ物なるべしと也
大將の父君也

〔付箋一〕

たれもく涙おとし給ふ。大將はまして故おと
おはせましかばと聞え出でなき給ふ。殿もえ心
づようもてなし給はず

〔37才〕 泣じとし給へども。さもえし給はずと也。下の
おしのごひ給ふへつゞく玉小櫛云もてなしの上
に。今一つもくじ有しが脱たるなるべし
人の上にて。かたくなりと見き侍しを

〔付箋一〕

かたくなは。口俗にフツガフ不出来といふ
「心にて」
② 次の子のおとなぶるに。親の立かはりしれゆく。
とあるをさしての給ふなり
子のおとなぶるに親のたちかはりしれゆく事はい
さのみ年はふけぬと也
くばくならぬよはひながら。かかる世にこそ侍けれ
な

しれゆくとは。老ほれて。やうく痴物に成

にかぎらず。諸道の事をいふ也源の補佐の臣にて。何事も再興あるをいふ也

《第43丁は遊び紙》

鈴木腹傍注少女巻抄出本

〔44才〕 源氏物語をとめの巻夕霧の君を六位に
さため給へる事又大学の道に物せさせ
給ふへくをしへ給へる事吉田家人岩上
氏とは刀自にあとらへてぬきうつしを
こひえたるなり

〔45才〕

○左大臣殿の御娘葵上の御腹の也

△夕霧の君也此年十二歳也十二歳元服の・桐壺巻にくはし
大殿はらの○わか君の△御元服のことおほしいそ
△父君の御本宅にてし玉ふ事順道なれはなり ○夕霧祖母
くを。二条院にてとおほせと△大宮のい

○其御心にそむくは氣の毒となり

ゆかしけにおほしたるもことなり心くるし。

○やはりにくも

○三条の宮

ければなほやかて。かの殿にてせさせたて

△此宮にて夕霧人となり玉ひ常にかしこにぬ玉へり

○葵上同腹の御兄夕霧御をち

まつり給△右大将ををしめ聞えて御をちの

○右大将の御弟たち也

○こゝにて句

とのほら。みな上達部のやむことなき○御

○上下の人の思はく各別にて也

おほえことにて。のみものしたまへはあるし

〔45才付箋〕

コノ文を清書するに左の如く体語用語ノ所又大殿はらのわか君の御元

「服のこと
思しいそくを云々トアルカ如クニワカリヤスク認メマホシキ也おほ
「いとのはらの御けんふく
のことおもしろそくナト雅ニカゝズタカ見デモヨミヤスクカカマホシ
「キ也 《三行朱》

大殿はらのわか君の御元服のこと思しいそくを云々大かた
世ゆすりて所せき御いそきのいきほひなり四位になしてん
と覺し世の人もさそあらむと思へるをまたいとくひは
なるほとを我心にまかせたる世にてしかゆくりなからんも
中々目なれたることなりと思しとめつあさきにて殿上
に返り給ふを大宮はあかすあさきことと思したるそこ
とわりいといほしかりける御対面ありて此事聞え給ふにて
今かうあなちにしもまたきにおひつかすましく侍れと
思やう侍りて大学の道にしはし習はさむのほい侍により
今二三年をいたつらの年に思ひなしておのつから大やけにも
仕う奉りぬへき程にもならは今ひとなり侍りなんみつ
からは九重の内にひ出侍りて世の中のありさまもしり侍ら
す

夜昼御前にさふらひてわつかになんはかなき書などもならひ
侍りしたゝかしこき御手よりつたへ侍したに何事もひろき心
をしらぬほとは文才まねふにも琴笛のしらへにもねたらす及
はぬ所おほくなん侍りけるはかなき親に賢き子のまさる
ためしはいとかたき事になん侍れは

右体にカクヘキ也 《一行朱》

〔45ウ〕

△三条宮にてし給ふ故に右大将御兄弟をかくいへり
かた△にもわれもわれもとさるへきことゝもととり

○元服の御まふけ也

とりにつかうまつり給。おほかた世ゆすりて

タを

所せき御いそきのいきほひなり四位に
なしてんとおほし世の人もさそあらんと

おもへるをまたいときひは。なるほとを我心

○幼稚

△一本ゆくりなからんもとあるよし

何のよしもなく一旦にふとしたる意也

にまかせたる世にてしかゆくりかなからんも△

△珍しけなき也

なかくめなれたることなりとおほしとめつ

〔46才〕

△一世ノ源氏ノ子は其蔭從五位なればあけの袍なるへきに父お

とゝわざと御心ありて六位にしおき給へる故に浅葱をき給

へる也夕は童の御時より殿上し給へる故にかへり給と云

御残念に思しめし

あさきにて殿上にかへり給を△大宮はあかす

○キヨウノサメタ事ト也

あさましきことゝおほしたるそこはりに

△いたはしにてこれも氣の毒といふか如し ○大宮源に也

いとをし△かりける御たいめんありて△この

○是より源御詞

こときこえ給に△たゝ今かうあなちにしもまた

○小櫛に云く生着す也元服させておとなにし給ふを云

きにおひつかす△まじう侍れと思ふやう侍て

○大学寮也 △学問也

大学△の道△にしばしならはさむのほい侍るに

○此下にそれ故またきに元服させてさてわざと六位にてさしおき
侍也といふ意をこめたる也

より△今二三年をいたつらのとしにおもひなして

〔46ウ〕

おのつからおほやけにもつかうまつりぬへき程

○人となるは四位以上に昇進するを云

にもならは今ひととなり侍なん。みつからは

こゝのへにおひいて侍て世中のありさまも
しり侍らすよるひる御前にさふらひてわ

つかになんふみなどもならひ侍りしたゝかし

○琴笛をもとめたり

△たゝは世中を広くしらぬにあたりだには
賢き御手といふをこめたる詞なり

こきつてより。つたえ侍したに△なにごともひろき

△世中の有様也

心を△しらぬ程は文才△まねふにもことふえのしら

○琴笛也 ○文字也

〔47才〕

へにもねたらす。およはぬ所△のおほくなん侍けるはか

なきおや △通親 △通子

いととかたき事になん侍れはましてつき

○御子孫の末々を思す御ころ也

つたはりつゝへたゝりゆかんほと△のゆくさきいと

○心えなく案しらるゝ也 △六位にして大学寮に入給事也

うしろめたき。によりなん思したまへおきて侍る△

○是よりなへて世中の御論也

たかき家の子として。つかさかうふり心にかなひ

△通通 △通学問

世中さかりにおこりならひぬれはかくもん

などに身くるるしめん事はいととほくなんおほ

ゆへかめるたはふれあそひをこのみて心のまゝ

なる官爵にのほりぬれは時にしたかふ世の

△上へには

人のしたにははなましるきをしつゝ△ついでう

しけしきとりつゝしたかふ程はおのつから人と

おほえてやむことなきやうなれと時うつり

〔48才〕

さるへき人にたちおくれ世おとろふるすゑには
人にかかるめあなつらるゝにかゝり所なきことになん侍る

○とかく。○からふみ学問をさしての給ふ也
△から学に対してさし当りたる世才をかく
の給ふと聞えたり桐壺巻から人の相人に
むかへてやまと相といふ事あるか如し
猶○ささ○をもととしてこそやまとたましゐ△の世に
もちひらるるかたもつよう侍らめさしあたり
○事足ぬ意也

ては心もとなきやうに侍ともつひのよのおもし
となるへき心おきてをならひなは侍らすなり
○上のうしろめたきに對せり
なん後もうしろやすかるへき○によりなんだ
今ははか／＼しからすなからもかくてはく

〈48ウ〉
○大学の学生は困窮者多きによりかゝることわざ
世にふるくうつほの物語にも見えたる也

くみ侍らはせまりたる大学のしう○とてわら
ひあなつる人もよも侍らしと思ふ給ふる○など
きこえしらせ給へば打なけき給てけにかくも
おほしよるへかりけるを此大將などもあまり

ひきたかへたる御ことなりとかたふき侍る○めるを
このをさなこゝちにもいとくちをしく大將
左衛門督の子ともなとを我よりは下らうと
○フシンニ思召す有様也

〈49才〉 おもひおとしたりしにたにみなおの／＼かかい
○官位の昇るを人となるといふ如し本は年をくひ
ておとなしくなるをいふ言なれとこゝにては官
位の昇りてさもとらしくなれるをいふる也
○とてといふことおちたる歟
しのほりつゝおよすけ○あへるに○あさきをいと

長幼^ヲ為^レ序^ト初入^ス学^ニ皆行^ニ束脩^ノ之^ヲ礼^ス於^ニ其^ノ師^ニ各
布^一端^ヲとある是もろこしの古礼をうつされたる物にて
学中にては貴賤にかゝはらず齒と徳とを貴
むといふ定めなり礼記にいはいく行^ニ一物^ニ而^{シテ}三^ノ善^ヲ
皆得^ル焉^ハ者^ハ唯^ニ世^ノ子^ニ而已^ニ其^ノ齒^ニ于^ニ学^ニ之^ヲ謂^フ也^ハ故^ニ世^ノ
子^ノ齒^ニ于^ニ学^ニ一^ノ国^ノ人^ノ觀^レ之^ヲ而^{シテ}曰^ク將^ニ君^ニ我^ニ而^{シテ}与^ニ我^ノ齒^ノ議^ス
者^ハ何^ノ也^ハ曰^ク有^ニ二^ノ君^ニ在^ニ即^ニ礼^ス然^ル而^{シテ}衆^ノ知^ニ二^ノ君^ニ臣^ニ義^ニ矣^ハ曰^ク
「有^ニ二^ノ父^ニ」
在^ニ則^ニ礼^ス然^ル衆^ノ知^ニ二^ノ父^ニ子^ニ之^ヲ道^ニ矣^ハ曰^ク
長^ニレ^ト長^ニ也^ハ然^ル而^{シテ}衆^ノ知^ニ二^ノ長^ニ幼^ニ之^ヲ節^ニ矣^ハといへる趣なり
されは東の院にてし給ひても猶学中の礼を行ひし事
とみゆ。○上達部殿上人珍しくいふかしきこと
にして云々といひはゝかる所なく例あらんに
まかせて
云々とあるをはじめ下にくさ／＼珍しき

事かたりなせる、皆この筋也、この事久しく
絶てのち、書記したる物もなければにや、ふるき
註とも、此段の意を得ずして皆ときあやま
られたり、師の小櫛も心つかれずと見えたり

〈50才〉 ○動せぬ答の事をしひて思ひなすなり

○細又孟に云く儒者は貧窮
なる者にて皆借着する也

なして○家よりほかにもとめたるさうそくとももの。

うちあはすかたくなしきすがたなどをものはちなく

○俗ニシカツヘカラシウトニアタル
おもゝちこはつかひむへ／＼しくもてなしつゝ座に

からしと思はれたるか心くるしうはへるなりと
聞え給へはうちわらひ給ていとおよすけても恨侍る
○こにてはこましくくれてといふが如し
源御詞の中にこの草子地を挟みて
うち笑給ひたる御意をとける也
なりないとはかなしやこの人の程よ」とていと
△カハユラシイ

うつくし△とおほしたり「学問などしてすこし
ものゝ心もえ侍らはそのうらみはおのつからとけ
侍なんときこえ給あさなつくる事はひんかしの
院にてし給ひんかしのたいをしつらはれたり
上達部殿上人めつらしくいふかしきこと
にして我もわれもつとひ参り給へりはかせ
○かへりて也かくたま／＼時めきたるにつけて
心おごりもすへき事なるに中々と也

ともゝな／＼か／＼おくしぬへしはゝかる所なく
例あらんにまかせてなたむる事なくきひしう
おこなへとおほせ給へはしひてつれなくおもひ

〔49ウ付箋〕

☆

此字 つくる事上の御元服と下の入学
との間にありて上下意かよへる事ありもろ

こしの礼に冠して字つけ成人の道を責と
いふ事ありてことに入学せんとし給ふ学生
がねの事なれば字をつくる博士やがてもろこ
しの烏帽子親めきてあらたに元服の作法
だちて何くれと教訓する作法の有しなるへし
大形は学校にて行ふ事なるを東の院にて
したま「」なるへし令ニ云凡学生^ノ在^ニ学^ニ各^ノ以^ニ

○賤き博士トモ年齢の順に上座ニナミ居
テタヲ下座ニツケタルナレヘシ

つきならびたるさほうよりしめみもしらぬ
さまともなりわか君たちはえたへすほゝゑ
まれぬさるは物わらひなどすましくすくしつゝ
しつまれる限をとゑりいたして△へいしなとも

〈50ウ〉

△ヒ玉ヲ作法ナリ

とらせ給へれと○すちことなりけるましらひにて

△俗ニ随分奇特ニト云カ如シ随分ツトメヘルツモリナレトモモトヨ
リ甚案外ナル事故ニ自然ト侮ガマシキ○意バエノ見ユルナルヘシ
右大將民部卿などのおほな／＼かはらけとり給へるを

△キヨウガサメキモノツブルゝ位ニ

あさましう△とかめ出つゝおろす△おほし●かいもと
△甚ハ古語ニテコノ頃には常イハ又詞ナルヲ大学ノ衆ハ書籍ニテ目
ナレ耳ナレテカクイフガヲカシキ也ヒザウハ俗ニ法外トイフコゝロ
トキコユタウフハタマフ也侍リタフブモヲカシクロマネタルナリ
あるしはなはたひさうに侍たうふ△かくはかりの

○賓師に聞え用ヒラレタル事ヲ云
○博士ノ名ヲノル也
しるしとある。なにかし。をしらすしてやおほやけに
はつかうまつり給ふはなはたをこなりなといふに
人々みなほころひてわらひぬれば又なりたかし

〈51才〉

○鳴ヤマンノ意トキコユモシハなもし落シカ

なりやまむ。○はなはたひさう。なり坐をひきて
○非常ニテ不作法ト云カ如シ

△侍リト云ベキヲタウビト云ハ玉ヘト云事ヲヨコナマリタ
ルカタウベトイフ事ハ理キコエタリ

オジ玉フベクモア
ラヌ事ヲ以テオド
スガヲカシキナリ

たちたうひ△なんなどおどしいふもいとをかし
みならひ給ぬ人々はめつらしくききようありと

△是ハ入學ヲ經玉ハサリシ人々ナリ

思ひ△このみちよりいてたち給へる上達部などはした
りがほにうちほゝゑみなどしつゝ△かゝるかたさまを
おほしこのみて心さし給ふかめてたきこと限なく

△カラ国ノサダメニ本ツキテ今一キハキビシク定メアヘリケン古

ノ大学ノ風儀此物語ノナカリセバ今代何トテ思ヤル事ヲ得ンヤ
思ひきこえ給へりいさゝかもいふをもせいす△なめ
けなりとてもとかむかしかましうのゝしりをる
かほとともゝ夜にいりてはなかゝゝ今すこしけちえん

○ヲゴカマシクトイフニ近ク○今世能の狂言
ノヤウナルモノソノカミアリシヨシナリ
なるほかけにさるかうかましくゝわひしけに人わる
○見苦シキサマといふ事也

○俗に成程といふ意にて其時人々ノ珍シク
ヲカシキ事に思シタルガ理ナルヨシナリ
け○なるなどさまゝにけに○いとなべてならすさま
ことなるわさなりけりおとゝはいとあされかた

○小櫛ニ云ク云々今按フニケウサウハキヤウサウ警察ノ
文字ノコゝロニテワカ如クアザレカタクナゝル者ハ警察
折檻ニアヒテ迷惑ニ及ブベシトヲコメキノ玉ヘルニヤ

くなくる身にてけうさうしまとはされなん○との
給ひてみすのうちにかくれてそ御らんしける

〔52才〕

数さたまれる座につきあまりてかへりまかつる
大学のしう共あるをきこしめしてつり殿の
かたにめしとゝめてことにもものなと給はせけり
ことはてゝまかつるはかせさいしんとめめして

博士才人

又々ふみつくらせ給上達部殿上人もさる

へきかきりをはみなとゝめさふらはせ給ふはかせ

の人々は四あんだゝの人は△おとゝをはしめたて

〔52才〕

まつりてせくつくり給ふきようある題のもし
ゑりて文章博士奉るみしかき頃の夜なれば
あけはてゝそかうする左中弁かうし

つかうまつるかたちいときよけなる人のこはつ
かひ物々しく神さひてよみあけたる程

△世ノ覺ヲ其ノ心モトモニト也

いとおもしろしおほえ心△ことなる博士なりけり
かゝるたかき家にうまれ給て世界の榮花に

〔53才〕

のみたはふれ給ふへき御身もちてまとの蜚を
むつひえたの雪をならし給ふ心さしのすくれ

△「」

たるさまを△よろのこゝによそへなつゝらへて心々
につくりあつめたるくことにおもしろくもろ
こしにもちもてわたりつたへまほしけなるよの
文ともなりとなん其頃世にめてゆすり

△「」

けるおとゝの御はさらなり△おやめきあはれ
なることさへすくれたるを涙おとしてずじ

〔53才〕

さわきしかと女のえしらぬ事まねぶは

○俗にスカン物チヤニといふ心也

にくきことをとうたてあれは△もらしつうちつゝき
△ヒヨナ事ニナル故ニト俗ニイフガ如シ

*花ニ令文ヲ引シタル如クコノ入學ノ儀式亦字ツクルニ同シ
ク珍シキ事ナルベケレド上ノ段ニユヅリテ略キ又下ノ段ニ
コゝニテモ又オロシノゝシル者トモアリテト云ヲ以テ思ヒ
ヤラセタルナルベシ

にし かくといふことせさせ給て*やかて此院の内
に御さうしつくりてまめやかにさえふかき

師にあつけきこえ給ふてそ學問せさせた

○俗ニアマリヲリゝモといふ心也

てまつり給ける大官の御もとにもをさゝゝ

○トカクイツマデモ

〔54才〕

まうて給はすよるひるうつくしみて猶△ちこ
のやうにのみもてなし聞え給へればかしこにて
はえものならひた給はしとしてしつかなる所に

○此ケリハ物ヲ断リタルコゝロニテ上ノヲサゝ
マウデ玉ハズマデノ故ヨシヲイヘルナリ

こめたてまつり給へるなりけり○月にみたひは
かりをまゐり給へとそゆるしきこえ給ひける
つとこもり給ひていふせきまゝにとのをつら
くもおはしますなかくるしからてもたか

〔54才〕

きくらゐにのぼり世にもちゐるゝ人はなくやは

○コゝニテハ俗ニ全体ノト云ニアタル

あると思ひきこえ給へとおほかたの○人からまめや

○俗に云篇実也 ○俗ニウハギガゝツキフント云ガ如シ

かに○あためきたる所なくおはすればいとよく

○俗ニ辛バウシテト云カ如シ

ねんして○いかてさるへきふみともとくよみ

〔55才〕

まつ我御まへにて心みせさせ給例の大将左大
弁式部大輔左中弁などはかりして御師
の大内記をめてし史記のかたきまきゝ

△△前にもアリ

れうしうけんにはかせのかへさうへきふし

△かへさうはかへす也おしかへして詰いふべきふしゝ也
ふしを△ひきいてゝひとわたりよませたてまつり

○たゝよみ玉ふのみならず義理をとき給ふをいふ

給ふに○いたらぬくまなくかたゝにかよはし△よみ
△試問玉フヘキ所々につけおき給ふ爪印也

○キモノツブレ位ニ也

給へるさまつましるし△のこらずあさましきまで○

〔55才付箋〕

△△△

是は寮試うけさせんとてまつ習礼し給ふ事をいへり学生を大
學寮にて試を寮試といふ試には史記をよましむるなりよくよ

「み得

たる人を擬文章生に補す擬進士とも云也凡儒業をつとむる
人の次第道をふるには先補ニ大学生ニ燈燭料を給はりて九年
の蜚雪のつとめをなして功をつみて後大學寮にて心見の時
史記をよまして難義を問ひ五条の中三条に通したるを及
第とす則文章得業生に補さらにまた櫛樟七年といひて
くすの木は七年をふれは用にたつにたとへて七年のあひた

学問して其後式部省にて課試をとぐ先詩賦を作次に策の文をかくむかし是に秀才進士の二科あり秀才をば方略と云方略は無端の大事と云也献策の時問題に答へてかく事はあたに大事也進士をば時務策といふ令といふ書に見えたり今の世には文章生得業生二人あり秀才のために始より給料を給はりて学問したる人也其は方略の宣旨をくたされて式部省にて課試せらるゝ也又入学の衆の中に器量有時博士是を挙すれば大寮にて試て文史記をよましむ及第の人を擬文章生に補すかす廿人有是を式部省にて試て詩若を賦をつくらしむ及第の人を文章生に補す是を

進士ともいへり式は御前にて勅題を不て試らるゝ事有文章生に補して後さらに方略の宣旨を蒙て課試をとくる事もあり進士は時務策たりといへとも方略の宣旨を蒙れば方略の試也文章生の方略をかうふりて献策する事は当職の時と又外国の様にたると散位の時とにかうふるなり京官に任して後は不建ならひ也或文章生さらに得業生に転して課試例とあり或は文章生にとまりて方略の試に及はざる事もあり源氏夕霧の君はいま此例也朱雀院の行幸の次に御前試に詩を作りて及第し給て進士になりてやかて侍臣の官に任し侍り

右花鳥余情十二卷

湖月抄ノ如ク本文ハヒキ下ケテ書テ上頭に注文ヲカクモヨロシカルヘシサレトコトノ由来大寮の令ノ文ナトナルヘキタケ今ノ世ノ人ノ見テ心得ヘキヤウニクハシク注セマホシキ也鈴木はなれ屋先生午御苦勞書テ玉ヘトコヒネカヒ侍ル也《四行朱》

九条玖山公東福寺の門前の乾亭院といふ敷の中の朽坊におはせし頃供御の後には御机にかゝらせ給ひ明暮源氏を御覽しけり此物語ほとおもしろき事はなし六十余年みれどもあかず是をみれば延喜の御代にすむこゝちすると不断仰られしある時紹巴法橋まゐりて何を御らんせらるると申されければ源語まためつらしき奇書は何か待るととひしかは源語又誰か参りて御閑居をなくさめ申すと申されければ源語と三度までおなし御返答なりしとそ

〈55ウ〉

△奇妙ニ御奇特トイフ意也

有がたければさるへきにこそおはしけれと。たれも涙おとし給ふ大將はまして故

おとゝおはせましかはときこえてゝなき給ふ殿も

△泣ジトシ玉ヘトモエシ玉ハズシテト也下のおしこのひ玉ふへつゝく

え心つようもてなし給はす人のうへにてかた

△俗ニフツガクフデキト云心ニテ次ノ子のおとなふるゝしれゆくことをさす詞也

くななりとみ聞侍りしをこのおとなふるにおや

のたちかはりしれゆくことはいくはくならぬ

△人の上のみならずいづしかと我身の上にもふりぬるはいくはくならぬ齢なからもうき事哉とにかくに世の中はかゝる物にこそ侍けれと也詞の上は述懐にて下心はふかくめでよるこひ玉ふ也

△此は嘆きのなにて上の句につきたるにもあらんか

齢なからかゝる世にこそ侍けれ△なのたまひて

〈56才〉 おしこのひ給をみる御師のこゝちうれしく

めいほくありと思へり大將さかつきさし給へはいたうゑひしれてをるかほつきいとやせくなり

△俗ニ大ノヘンブツト云意也

世のひかもの△にてさえのほとよりはもちあひられす

△小櫛ニ云く云々

すけなくて△みまつしくなんありけるを御覽しうる所ありてかくとりわきめしよせたる

花宴卷に公事にそしうなる物の師共云々とあると同意はえ也見合すべし

〈56ウ〉

△夕をさす

りて此きみ△の御とくにたちまちに身をかへたるとおもへはましてゆくさきはならふへき人

△二本コノ字なきを小櫛によしとせられたり

なき御△おほえそあらんかし大学にまゐり給日は

寮門

れうもん上達部の御くるまとも数しらすつとひとりおほかた世にのこりたる人あらしとみえ

たるに又なくもてかしつかれてつくるはれいり給へるくわさの君の御さまけにかゝるま

△あへすと同じく俗に似合すといふこゝろ也

〈57才〉

△見苦しき也

△ここにつもし一つおちたるべし

例のあやしき△物とものたちましりつゝ△さゝる

たる坐のすゑをからしとおぼすそいこと

はりなるやこゝにてもまたおろしのゝしる

物ともありてめさましけれとすこしも

おくせすよみはて給つむかしおほして大学

〈57ウ〉

のさかゆる頃なれはかみなかしもの人われもくと此道に心ざしあつまればいよく世中に

さえありはかゝしき人おほくなんありける

もんになきさうなといふなることゝもよりうち

はしめすかゝしうしはて給へればひとへに

△ここにみもしある本を小櫛によしとせられたり

心にいれて師も弟子もいとけはけまし給ふ

殿にも文つくりしけく博士才人とも所えたり

〈58才〉 あらはるゝ世になん有ける

書入と付箋

〈8才〉

(一) 此注ノ中ニ猶また御心付キの説あらば御書そへ可被下候。

(文ノ間ノコト也) 源語ノ御考ヘノ説も仕らば御書そへ可被下候。

美石主 《文莫》第七号97頁参照

(二) 三月廿九日夕着 《右の(一)の付箋の上に貼付》

(三) 此表題

あさきの袖 光源氏物語少女巻 全

如此名を設るはよろしからんか。

〈9ウ〉

(一) 此巻に若君と申は光源氏君の御子、大殿は葵上、其御腹に生れ給ふ若君

にて、夕霧君と申す。大宮とは「源氏君の御父」桐壺（の）帝の御姊左大臣（の）の北方、葵上の御母、夕霧君の祖母なり。右大将、左衛門督など、葵上の御はらから、夕霧君の御伯父たちをも心得おくべし。
コ、ニかく記して系図モ有てよけんトオモヒ侍ルナリ。大秀
（大秀）
（二）今年三十三才、官ハ内大臣也。
（大秀）
（三）三宮
（大秀）
（四）一條摂政「薄雲巻にうせ給ふ。去年春のこと也。」
（大秀）
（五）大殿
（大秀）
（六）母三宮此三字不用敷 秀
（大秀）
（七）民部卿「入学の式の処に右大将民部卿など云々と有。系図なき人也。これも御伯父の殿原の一人なるべし」
（大秀）
（一）一條摂政殿「原文は「左大臣殿」。その上の貼紙に「一條摂政殿」と記す。」
（大秀）

（二）大殿腹の若君は夕霧君なり。源氏君の御子、御母は葵上なり。トアラマホシ。コハ上ニ記タレドコ、ニモ有ベキ也。サテ細河花ナドノ字、論アル処カ、珍シキ一説カニノミ記テ、一通リニヨク知レタルコトハ記サズトモアルベシト思玉フル也。
○御元服 夕霧君ことし十二歳なり。十二元服の例、桐壺巻、河海抄に見えたり。○二條院は御父源氏君の御本宅なれば、其所にて為給ふべき順道なれば、しか思召なり。○大宮は桐壺帝の御弟、葵上の御母なり。夕霧君生給ひて後やがて亡給ひたれば、御孫夕霧君をおふし立給ひしによりて殊にいとほしみ給ふ故、御元服のさまも見まほしく思召ことわり也。○彼殿は大宮の住給ふ三条宮也。夕霧君もそこにて成長（給ひ）常（給ひ）にそこに居給ふ故、猶やがてといへり。○いそぐは用意する事。○ゆ

かしげに見まほしく思召様子也。○心ぐるしは俗にキノドクといふ意、祖母君の御心にそむくはきのどくとなり。○猶はヤハリ。○やがてはスグニ其ママといふ意也。
スベテ如此、講説スル時モ、或ハ人ニヨミキカスルニモ語路ノ次第ヨクカ、マホシ。傍注モ大方ハ削テ注ニ入マホシク覺侍ルナリ。大秀
（大秀）
（10ウ）
（一）上達部 ○やむことなき ○御おぼえ ナド云言ノ意注アラマホシ。
○ものし給へばハ~~~~也。○あるじ方ハ、今三条宮にて元服せさせ給へば、御母方の親族、右大将の御兄弟の御方々をいへり。
（大秀）
（大秀）
（二）給へり。系図に致仕大殿。
（大秀）
（11オ）
（一）大かた世ゆすりて所せき云々 美石云、以上ハ源氏君ノ若君トイヒ、御母方の権勢トイヒ、四位ハ勿論ノコトニテ、タトヒ三位ニナシ玉ヒテモ、誰ソシルモノモナイという氣味をふくめたるが如し。《文頭の口内の○印は朱》
（美石）
（11ウ）
（一）○きびはハ書紀に稚字を訓たり。夕霧のまだ十二にてわかきよし也。○我心に云々 官位などの事、源君の御心の儘なる世なれば、我御子なれば四位にもなし給ふべく世間にも思ひをる世なれば、餘り我儘にし給ふとそしる人も有まじけれど、そこを引たがへて一通の作法よりおとしてひくゝ六位にし給ふ也。
（大秀）
（12オ）
①大平云
コレマデニシカルベキツトメノ功勞モナクテト云コト也。（朱 太平）
（一）あさぎにて 美石云、四位相当ノ所ナレバ、一階ヒキク五位ニナサレテヨキスチナルヲ、今一階サゲテ六位ニシモノサレタルハ、大学頭ガ五位ナレバナルベシ。

（一）あさぎにて 美石云、四位相当ノ所ナレバ、一階ヒキク五位ニナサレテヨキスチナルヲ、今一階サゲテ六位ニシモノサレタルハ、大学頭ガ五位ナレバナルベシ。

又、高貴ノ家ノ若君ナドハ、六位ニテモ、他ヨリノアヘシラヒモ、自身ノカマヘモ、普通ノモノ、五位四位ナドヨリモオモシキモノ也。サレバ、随分ト輕クセザレバ物学ビナドニ益薄キモノナレバ也。スデニ夕霧君モホドリハ思ヒアガリテオハシタルコト、次ノ大宮ノ御詞ニ、大将、左衛門督の子どもなどを我よりは下臈と思ひおとしたりしだに云々ト見エタリ。
あさぎにて殿上にかへり給ふ
美云、殿上にノ文字心得がたし。是は殿上より三条殿に帰り給ふなれば、よりトアルベキ所也。万葉ノ哥ニ「よりノ意ニ遣ヒタルアレバ其例ナルカ」
但シ、殿上にト云テモ聞ユル文ナルカ、不審也。
（美石）
（大平）
○然り〜
大平云、○此説イヅレモヨロシ。サレド、コ、ハモトノマ、ニテコノ説ヲソヘズニオクベキ也。殿上よりかへり給ふト云コトモ猶イカ、ナリマシ。スベテ不審ナガラモシバラクコ、マ、タルベシ。
（美石の付箋への書添 大平）

（一）○此条は、源君、大宮に對面し給ひて語給ふ御詞也ト注シテ傍注可削。
△三年 タゞかな付ニテヨシ。孟字不付てよし。
（大秀）
（13オ）
①マウ、《左右傍書 朱》
（大平）
（一）大秀云、兄のおとなぶるをおよづけと云（およも是）なるべし。
（大秀）
（二）こめたりノ下
大秀按に、源君の夕霧の位をわざと低くしたまふは大ニ御心有べし。すべて己より貴き人には教諭「こと」しがたきもの也。ことに源君の

（一）大秀云、兄のおとなぶるをおよづけと云（およも是）なるべし。
（大秀）
（二）こめたりノ下
大秀按に、源君の夕霧の位をわざと低くしたまふは大ニ御心有べし。すべて己より貴き人には教諭「こと」しがたきもの也。ことに源君の

御子、右大将の御甥にて、やむことなき夕霧君なれば、師も心おくて教さとす事のしがたからんと、御父君の思召てわざと位を低くし給ふなるべし。
（大秀）
（13ウ）
①大平主
（一）此の今ハ俗ニ追ツケといふ意也。上ノ傍注可削。
（大秀）
（14オ）
①コレハ書入ルニ不及、除クベキコト也
（大平）

大平云
ねたらず 鍛錬ノ不足ト云意敷。ねハ、ねり、ねるノ鉢語ニテ、ねトバカリ云モ鉢也。又、ねりト云モ鉢也。
歌モ鉢、誦も鉢ナルガ如シ。
（朱 大平）

（一）琴笛のしらべにもねたらず
美石云、ねたらずハタゞ文才をまねぶにも、琴笛をしらぶるにも行トバカズ及バヌ所多クといふことなるを、琴笛よりかゝりたれば、音と云て詞の文とせるにはあらざらんか。
趣意をつづめていはゞ、
御名人ノ御手カラ伝ハツタレドモ、世上ノ人ニ多クモマレズ、切差ヲ受又故ニ、何事ニモ行届カヌ所が多クサゴザリマス、といふには侍らじか。
鈴木翁の御解、少し聞とりがたし。師ノ御説ハヨクワカレドモコ、ノ注ニハ丁寧過タルヤウ也。
（美石）
（二）○みづからは 源君の自称也。○伝へはべりしだに だにはスラにてヤトアルベキカ。○文才 弄花一癖の御説にモンザイと訓と有ト注

スベクヤ。

（大秀）

①思ふ《ミセケチと訂正は朱》

（大平）

（一）〇高き家の子として、^云々の条につきて、近き世の物語をしるさむはいかゞ。

みちのくに、廿三石余の地をしり給ひて何がしの左中將と申御大名おはしけり。それつかふる近習の侍に小櫃与五右衛門と申者有けり。或時、中將君のたまはく、汝が身にかまひて樂とする事有べしとの給へば、さに候、おのれ身の幸とおもひて心にたのしみおもふ事二ツなん侍ると申せば、いへ、きかんとおのれ給へば、申けるやう、一には、よくぞ富たる家にうまれざりしとおもひて、身のまづしきを幸ひと楽しくおもひ侍りと申せば、そはいとあやしき事をもいふかな、いかなる故にまづしきが幸なるぞや。おのれ、もし富たる家に生まれましかば常におごりて礼儀といふこともしらず、徒に物をも費やし侍べきを、貧しくてさる事侍らねば、道にもそむかず、礼をもかゝず侍るを身の幸とおぼえ侍になんと申き。中將君、今一ツはと仰たまへば、是はたやすくは申がたし、よき折をえてこそ申さむとて不申き。かくて十日斗も過て、与五右衛門、今一の樂のよしきかん、とくくといふれば、こはいともかしこしとて、御前に平伏てぬかづきををり。しひてきかんとせめ給へばいなきがたくて、さらばかしこけれど申侍らんとて申けるやう、おのれ、よくも大名に侍らざりし、是、大なる身の幸に侍りとまうす。そはいかなる故ぞと問給へば、さに候、凡、大名のふるまひを見侍るに、皆その家らひよりしれものと

（二）コ、ノ傍注ドモ皆本注ノ方ニ入マホシ。

〇めまじろぎハ本文「を」カク改テ、注ニめまじろぎハ河海、花鳥、孟津にみなしかり。湖月本にはなまじろぎと有は誤なるべし、トアラマホシ。

（大秀）

（15ウ）

①追しようし

（フリガナ 朱 大平）

①桐つぼノ巻に、いよく道々のざえをならはし給ふトアル、ソノ注ニモ咲花ノ説ニ天下をたすくべき人は博學ならではあしかるべきよし見えた。無学行政如「無燭夜行」とも、人不学不知道ともいへり。細流同。

（16オ）

（大平）

②「」除クベク覺ユ。《「」印は本文部の「」印と対応して削除すべき部分を示す。》

高位ノ人ニモノ物ノ達人モタエテ無シトハイヒガタシ。又、此語ニヨリテ高位高官ノ人、古今ノ間ニ高位高官ノ人ハ達人無キ道理ナレバ、ワレラモ学事ニ志スコトハ止メニ為ント自ラ棄ルコ、ロニ（不明）「ヲサトスガゴトシ」。

（大平）

③コノ説ニテハタゞ遊ビ戯ノ御相手ニナリ、御機嫌ニ從フノミノコトニナリテコトセバシ。

④追従し気色どりつゝしたがふ

（朱 大平）

⑤露も心にかげざる也

（傍書 朱 大平）

（一）師ノ御書入、桐壺卷ノ注ハ必此所ニ書入ベク覺ユ。

注「さるほどに高位大祿の人に物の達人はまれなる物なる事、何方にてもいつとても同じ」

し、おろかものになし候なるを、おのれは師も有、朋たちも有て、あしきわざをいさめ、よくいましめ候を、大名衆にはさる人侍らず、御本上賢き御方々もたえておはせぬにはあらざるを、御前にまゐるものは皆御つかへ人の限にて、萬仰にそむかず、いさゝかもよき事あれば山の如にほめたて、悪く道理にあたはぬ事のたまひても、ひたぶるによるしと申故、君はつひにおろか者に成給ひて、自つとめ行給ふべき事をさへ家老にのみゆだねて、民のからきめを見て君を恨奉をもしり給はず、おのが御心のまゝにふるまひて、あしき事のみ弥増にし給へども、皆追従する者のみにて、一言もいさむる者は一人もなく、心とき御うまれつきなるも学問し給はねばよき事は露ばかりも知給ふ事なく候ぞかし。たまぐ人となら、人に欺かれてのみ御口を過し、痴者にしなされておごり居給ふ御方々こそかなしう侍れ。人にあざむかれ、人に愚者といはれ、しらぬことに人の恨をおひ侍るばかりあぢきなく口をしき事は侍らずや。おのれ大名ならねば、さる事侍らぬこそ幸なれと思ひ侍るになんと申ければ、中將君きこしめして、つらく打かたぶきつゝ此詞をいたく諸なひめで給ひて、夫より学問に志ふかく、世の道理をしらしめし、御身のおこなひを正しくし給ひて、民をめぐみ、あはれみ給ひけるとぞ。其比、某君くんとて三たりの賢き御方々とほめたゝ奉りて、後世まで御徳あふぎ奉れりとなん。

此与五右衛門が心、紫式部のこの詞、心しらひに似て、いとめでたしとおもへば、こゝに引入まほしくなん。さらば、こをよむ人も此。心しらひをうまく得ましと思ひ給ふるになん。 大秀（大秀）

師云、除クベク覺ユ云々々々モ聞エタル御説ナレドモ、又アラマホシクモ覺ユ。サレバ

いつとても同じ。然れば高位大祿の人などは、いよく此所の文をもよく味ひて、憤を發してものせらるべき事とぞ思はるゝかし

（美石）

ナドヤウニ云テハイカゞ。

コノ説ヨロシ。余ハトモカクモ用ヒ不用イツレニテモヨロシ。

（二行朱 大平）

追しようし

朱書ノ通りナラデハコトタラズ。コ、ラハクハシク云ベキ所也。

（美石）

（16ウ）

①おのづから人とおぼえて 世ノ人ノ追従シ、氣ニ合フヤウニトリハヤスニノリテ、自然ト自身ハ良人君子デヤ、己ハ歴々ヂヤト思フヲ云也。

やむごとなきやうなれど、ソノ跡ヲ外人ヨリ見思フニ、マコトニ大家ノ衆ト思ハル、ケレドモト云コト也。

時うつりハ、寵命ヲ蒙リシ君ノ代モカハリ、時めきし威勢モオトロフルヲ云也。

さるべき人に立おくれ 高官タリシ父ニ離レ、威權アリシ「人ニ」親族ニ別レナドスルヲ云也。源氏ノ君、父帝ノ御代カハリテ後、須磨ニウツロヒ玉フホドノ世ノアリサマナド思フベシ。

かゝり所なき事になんて 《「」印は本文部の「」印と対応する》

猶ざえをもとゝして

トカクドノミチニモ学問ヲ為テ、歴々ニモセヨ何ニセヨ、第一ニ学才ヲ持タルウヘニ今日ノ政事、朝務ノ器量モアルデナケレバ、世ニ用ヒラル、コト手ウスカルベシト也。

やまとだましひの世に用ひらるゝ方

コレハ漢學ノホマレノ方ニテハナク、今日ノ政務ノ器量ノ世上ノ人ノ帰順シ尊信スルヲ云也。

②コノ説ハ少シ脇筋ヘソレテ此所ノ教諭ニハ要ナキガ如シ。

（朱 大平）

③是より《ミセケチと訂正は朱》

（大平）

(17才)
①侍らじと。思う給ふる。印と左傍書は朱。
(大平)

(一) 侍らじと。 思う給ふる。 此脱字、如此本文に補入給ふはいかゞ。
上ゆくりなからんモカ字を角の中ニ入てよろしかるべし。 大秀は御教
通。になどいたし候へども、師の記伝にならひて、補は○、除べき
は□に入て本行に有たくぞんじ候也。
(大秀)

(二) かくてはぐみ侍らば
只今ノウチハ六位ノ賤官デモ、私ガカヤウニ致シテ養育シテマリマス
レバ、官人仲間ノ大学ノ衆ヂヤトアナドル人モモヤゴザリマスマイ
此釈モアラマホシ。
(美石)

(17才)
○せまりたる大学の衆。 大秀按ニ、夕霧君、今、大学衆の困窮なる
人々の仲間ニ入給ふは見るしけれども、遂には世のおもしろとなるべき
心掟をならひ給ひ、源氏のはぐみそだて給ひて出身し給ふけれ
ば、大学衆とアナドル人もあらじとのたまふなるべし。
(大秀)

(18才)
①およずけあへるに。 あさぎを。 印と左傍書は朱。
(大平)

②大平云、げにかくも思しよるべかりける云々、大宮ノ思召御心ノ内也。
今、源氏君ノダンノ理害ヲトキテ、ワツツクダキツノ玉ヘルハ、甚至
極ノ御料簡ナレバ、ナルホド左様ノ思召寄リモ有サウナコトヂヤワイト、
理ニ伏侍玉ヘル御心中也。 サテ此大將ト云ヨリ御返答ノ語也。
(朱 大平)

(一) げにかくもおぼしよるべかりけるを
美石云、げにヨリ大宮ノ御詞ナルベシ。 然ラザレバをノ言モ不都合也。

師ノ朱書ノ御説タガヘルニハ侍ラズヤ。

訳云大宮ナルホド御咄ヲ承レバ、カヤウニモオボシヨリ玉ヒテヨロシカ
ルベキコトデモ御ザリマスルヲ、シカシ私バカリデモナク、息子の大将
なども、あまり引違た事ヂヤト、首ヲカダゲテ不審ガリマスルヲ、又此
夕霧の児供心ニモ。
(大平)

以上以下共ニ源氏ノ御説ニテ一言モナクハアレドモ、猶御内心ニテ
ハ、ソレデモセメテ五位ニデモナサレバヨイノ二ト言ヤウニ、今一
度為直シタクテ、大將ノオボス所モ若君ノムゴタラシイコトモナラ
ベタテ、ノ玉ヘルヤウ也。
(美石)

○げにかくも——ヲ大宮ノ思召ス御心ノ内也トイヘル大平ガ説ハ大ニ
ワロシ。 アヤマリ也。 モトノマ、ニテヨキ所也。
(大平)

(18才)
①大平云、うちわらひてハ、源ノ御心中ニ、若君ノ御なげき浅黄をからし
ト思召ト大宮ノ給へるをきゝて、心中ニハ涙ノ催スヲ、涙ヲ吞入レテ
打マギラハシテスラワヒヲ為玉フナルベシ。 カナシミヲ表ニアラハシ
玉ハヌナルベシ。
又云、はぐみノ巻、ゆびくひノ女ノ馬頭ノイロくトイヒヒシタル時
ニ、モハヤタマラズ覚悟ヲキハメテ馬ノ頭ヲアナドリアザケル心ニナリ
テ、心中ニタマリカネナル時に少しうちわらひてよろづに見たてなく
云々トイヘル、コレハ馬頭ガ論弁ヲ非也ト聞定メテ、底心ニアナドリヲ
生ジテ、ソレヲ押テ打笑也。 此文ノ意ニテハ大平ガ初ノ説イカバア
ラン。 モシクハ大宮ノ御女儀ノ仰ラル、理ヲ下ニモドキ玉フ意ヲ此打わ
らひニテキカスル文歟。 コノモ、簀木ノモ打わらひハ先キノ論弁ヲモ
ドキ斥スルサマニモキコユル文也。
(大平)

右ノ如ク、うちわらひノ解ヲ書成タレドモ、此注書□要ニモアラズ。
注ヲモラシテモヨキ所也。
(朱 大平)

(一) 打わらひ給て 美石云、コハ師ノ初メノ御説、心中ニハ涙ノ催スヲ、の
方ナルベク思ハル。 猶イハバ、源ノ御心中ニ半分ハフビンに、又半分ハ
夕霧君ノグウタラベイデナク心ニハリノアルノ内心ニウレシクオボスト、
二ツツカネタルヤウ也。 サレド此ウラシクノ方ハ過タル考ナランカ。
又云、心底ニアナドリヲ生ジテ、ノ御説モステガタクハ覚ユレドモ、猶
前ノ方マサルヤウ也。
(美石)

いとおよずけても 鈴木翁ノ解ヨロシクハ聞ユレドモ、此所ニテハ、俗
ニ云、ベンコウニマア恨ミマスルヂヤナといふにも有べし。
(一) うち笑ひ 美石又試に一説。 只何となく時のアイソウに打笑ふ事もある
もの也。
さて此うち笑ひノ解も此所ニなくては事足らぬやう也。
(美石)

美石ハ初ノ御説ヲ入レマホシク覚ユ。
(二) 説トモニ書入ルコトヨロシカルベシ。 ソレ即教ヘトナル也。
(朱 大平)

(19才)
(一) あざなつくる事 美云、コレハ上ノ元服トハ同日ノコトニハアラズ。 後
日ノコト也。 此コトモ一言注スベクヤ。
(大平)

漢国ニテハなべての人皆字「作」る事と聞ゆ。 皇国ニテハ学文大学ニ
入ラヌ人ハ字ハつけぬ事也。 此コトモ一言アルベクヤ。
(美石)

コノ美石ノ説モ書入マホシ。
(朱 大平)

(20才)
①漢家に用ゆると《傍書朱》
(大秀)

②たえて用ゆること《ミセケチと傍書は朱》
(大平)

③あざるのあざと
(大平)

(20才)

(一) 此一条は大学の衆に源君の仰せらるゝ事也。 細流に云々
(大秀)

(21才)

①「学」《朱の×印で抹消》
(大平)

(23才)

①おもゝちはカホツキ也。 うべくしくもてなしは
(朱 大平)

(一) つれなくは、サアラヌ体なり。
(大秀)

(二) 家より外に、儒者は貧窮なるものなれば人にかりぬる装束なり。
(大秀)

○打あはずは、ユキタケソロハズなり。 ○かたくなは、フツガウなり。
(大秀)

(23才)

①大平主
(大平)

②巻々ノ歌ノ所ニ歌ヲアシザマニ評シタルコトモ例ノコト也。
(朱 大平)

コレ朗本ヘハ書付不遺
(大平)

□細注、ワリガキ
(大平)

③□その心しらひとは、此一事は皆高位貴族の所へ学問の事、道々しき事
を耳に入る事なれば、をこにいひなしてまぎらはせるなり。
(朱 大平)

コレモ朗本ヘハ書入不遺
(大平)

(24才)

①本よりをかしかりぬべき事をしり給へばなり。
(大平)

②必年老たるにかざらじ
(大平)

③せさせるゝは
(大平)

(一) ○若き君達はえたへず 大学の衆の形のをかしきを若き御方々はこらへかね給ふなり。○ほゝゑむは、わらひをこらへて声にあらはさず、

面に笑□□のみゆる也。下にほころびてわらふと有。○さるはは、さればと有べきか。若くてはえこらへて笑給ふ故物笑などせぬ人を選び給ふよし也。○すぐしつゝは、細流に年寄たる人をいふ也。腹云、わかき程を過したるを云べし。必年老たるには限らず、若人の中にもしづまりしとやかなる人をえり出したる也。(大秀)

(二) 契沖云、今案にくすしつゝを下上に写誤にや。くすしき人といふは、常にくすみたる人といふ也。

古事記伝四十二卷、ほたりとらすもほたりとりと有長歌の解に、秀禰取となりと有。こゝに可考。大秀按、ホタリは即今の瓶子、今俗に徳利といふも同物なるべし。トクリは若タリの転語ならんか。(大秀)

(三) せさするは (大秀)

〔24ウ〕 (ミセケチと傍書は朱 大平)

①ならんか (ミセケチと傍書は朱 大平)

②才勤メ (ミセケチと傍書は朱 大平)

(一) おほなくは、美云、俗にゴセウ大事二といふに近からんか。此所ハ試

ニイハズ、孟キは大学頭第一に初めて若君にさし、ソレヨリモシクハ頭にさしつゞきたる人々のも若君戴き給ふ事など、定りたる例にもあるべし。さて、師弟ノ孟事済て後に亭主方の人々孟をはとる例などならんを、大將も誰も随分ゴセウ大事ト慎てもおし給へど、一躰不案内なる事故に、師弟の孟事より以前にかはらけとり給ふ故に咎メ出タルニハアラズヤ。

サレドモコハ元来不案内ノコトナレバ試ニイフ也。(美石)

大平云、コノワタリノ文詞ハ、ソノ世ノアリサマヲヨクシラズ

テハ云ガタキ所也。アマリクハシク云テハイカゞ也。凡ソニスベキ事也。(大平)

(二) かはらけとり給へるをあさましうとがめ出つゝ

美石又一説、孟子云、天下有達尊三。爵一。齒一。德一。朝廷莫如爵。郷党莫如齒。輔世長民。莫如德。愚得有其一以慢其二哉。とアルナドヲ以テ思へば、大將ナドハ爵ハ尊ケレドモ、御年令モ大学頭ナドヨリハ下ナルベシ。大学頭ハ老人トオモハル。然レバ頭ノ方ニハ徳ト齒ト二尊アレバ、大將ナドモカハル席ニテハコトニ尊ヒ玉フベキヲ、朝廷ノ平日ノ例ニテ孟ヲモ先キヘトリ玉フヲ咎ムルニハアラジカ。(美石)

○大平云、此説モクハシキニ過タリ。漢文ヲ引出シテ云ニハ、教示ニナルコトニハ引ベシ。タ、一ワタリ爵、令、徳ナドヲ尊ブコトハ引ニ不及コト也。(大平)

〔25ウ〕 (あさましう云々(朱) (抹消は朱) (朱の部分 大平)

①見ゆればにや□興がサメ肝ノツブレル位ニ (補入 大平)

②無礼を。シカルなり (補入 大平)

③まねびて□興じたる也 (補入 大平)

(一) 仕うまつりたうぶ 玉小櫛の一本によるべし。給ふと有は誤也。(大秀)

〔26ウ〕 (とていふことには、ぬくはにひて、くへる) ①侍りたうぶもきゝなれず、をこましき也《ミセケチと左右傍書は朱》(大平)

②その名をのれる也。《ミセケチと傍書は朱》(大平)

〔26ウ〕 ①なもじをおと せるか。《ミセケチと傍書は朱》(大平)

鳴呼なる事をするものと見えたり。物まねをのみするものにあらず。又云、わびしげ、こゝにては迷惑めきて人わろげなると云意也。貧乏らしき意にてはあらじ平。不用。(朱 大平)

(一) さるがうがましき (朱 大平)

〔27ウ〕

①大平云、座を引て立たうびなんハ、列座ヲ引退きて此場を立給へといふにてもあるべし。さるは実にはあらず、強く制する詞也。《ミセケチは墨》(朱 大平)

(一) 立侍りなんといふべきを、ト云テハ大学衆ガ立マセウと云意になりていかゞ。こゝは立給〔へ〕とあれば、大將や己下の笑給ふ御方々に立過給へといふ也。(大秀)

(二) 立たうびなん 美云、師ノ朱書ノ御説ハナダオモシロク覺ユ。サルハ笑フ人ナドアリテハ座ノクヅレトナリテ、法式ノトトノヒ難ケレバ、列座ヲ引テオタチ下サレといふなるべし。(美石)

〔27ウ〕

(一) 此注解同じ趣意ながら本末たがへり。かゝる方さま云云とは若君を大学にいれ給ふを主として、此日の作法など行ひ給ふ事、富貴にあける人の情にはいとめづらかにて奇特なるよと感じ奉り給ふなど書べき也。(千廣)

〔大平云、此千廣ノ説ヨロシ〕ヤハリ下地ノトキ方ニテヨロシキ也。(大平)

〔28ウ〕

①こゝの文は実をいふなり。これ即をしへともなる事なり。心をとどむべき事なり。(朱 大平)

②朗云 (朱 大平)

③一きは (大平)

〔28ウ〕 ①得ん〔や〕《や》を朱の丸印で抹消》(大平)

②後の世にしては 古物語の (大平)

③火陰 《ミセケチと訂正は朱》 (大平)

(一) 千廣云、猿樂てふ詞、此物語を初、枕草紙、其余何かに出たる詞にて、

〔30才〕

①数さだまれる座につき余りて

〔美石〕

〔31才〕

①心ばえ《ミセケチと訂正は朱》

〔大平〕

〔32才〕

①作りたる詩の趣意をいへるは、桐壺ノ巻に高麗の相人が源氏の君に奉りたる詞の趣きをいへるに同じ。

〔朱 大平〕

〔千廣〕、詩文を書いれざるは例なき故にもあるべけれど、式部が才をもて例などに拘るべきにあらず。これはもと女文のあはれをのべたる物語に事々しくさかしらに詩文などかゝんは、中々に興もなく、あはれのかたもうすくなるべき故ならん乎。

〔33才〕

①大宮の御もとにも

云々

美石云、御祖母ノ御コトナレバ、チイサイ児ノヤウニアマヤカシ玉へバ、其アマヤカシニ乗テ御修行ガ出来マイトテ、二条院ニバカリオキ申テ、大宮ヘサヘ月三度斗定メ玉ヒテ、其外ノ他出ハ勿論ユルシ玉ハヌ也。

此コトモアラマホシ。

コレモアラクシテオクベキコト也。クハシクスルニ不及。

〔34才〕

①玉ノ緒五ノ十八丁ニ

をやすめ辞也、トアルニヨルベシ。てにをトイヘバ少シタガフヤウ也。ソノウヘてにをト云時ノをニニテモナケレバ、やすめ辞也ト注スルゾヨキ。

〔朱 大平〕

②三たびばかりをまゐり給へ

〔朱 大平〕

〔37才〕

①かたくなは□ 俗にフツガフ、不出来 といふ心に

②□頑愚ト云事にて、こゝにては俗にヘンクツ、愚癡ナト〔思ひしといふが如し〕これは、親ノ子ヲホメなどするを他より見ては、〔虫損〕見苦しと思ふ事也。

〔朱 大平〕

①一人の上にてかたくなりと云々、子のおとなぶるに云々

美云、子ヲ誉ラレ、バウレシカルヲ、人ノ上ニテ頑愚ナコトト見マシタガ、子ノ成人スルニ入替リテ親ノ年老テ癡物ニナリユクコトハ、サノミ老年デモナイ齒ナガラ云々

〔美石〕

〔37才〕

①詞の上ハ述懐のやうにて

〔朱 大平〕

②下心はふかくよるこびて

〔朱 大平〕

〔38才〕

①俗に日本一 《ミセケチと傍書は朱》

〔朱 大平〕

②世のひがもの□キツイズレモノ

〔朱 大平〕

③大ノヘンブツ

〔朱 大平〕

④〔す〕げなくて《朱の〇印で「す」を抹消》

〔朱 大平〕

〔38才〕

①又大平云、資財の貯なくてといふにても有べし。

〔朱 大平〕

〔40才〕

①又なくもてかしづかれ云々、若君六位にてはあれど、もとよりの御おぼえ、又ならぶ人なき御いきほひを思ふべし。かゝるまじらひは大学寮のまじらひ也△

〔朱 大平〕

〔34才〕

①かくくるしからでも高き位に昇り、世に用ひらるゝ人はなくやはある。コレタ霧ノ思召心にて、大方ノ世ノ人ノ心ニモ思フコト也。学問の道をはげむに〔も〕及ばであ〔るを〕此ふみよむ人の耳に。きかする辞也。

〔朱 大平〕

①かくくるしからでも

朱書ノ御解ナクテハ大事ノコトタラヌサマ也。

〔美石〕

〔35才〕

①師の伝□の論の趣

〔大平〕

〔36才〕

①あさましト云辞ハ、今人ノ思フハむげにとるにたらぬ浅はかなる〔虫損〕にいふ語ト思ヘドモ、サニハアラズ。あきれるト云コト也。キモノツブレト云ニ同ジ。著聞集ナドニ、あさむ、あさみ、或ハ見あさむナド云コトノアルあさむニ同ジ。

②キモノツブレルホドニ。御奇特ニ奇妙ナト也。

〔傍書と抹消 大平〕

③さるべきは然有ベキ也。サヤウ有ベキ道理ノ有バナルベシト云コト也。ソハ源氏ノ君ノ御子タレバトカ、又一。

④一〇は④への連続を指示している

〔朱 大平〕

④一〇。仏説の宿縁、又は宿習

〔朱 大平〕

⑤心づよう。もてなし給はず

〔朱 大平〕

⑥上文の趣にて源の君も感嘆し給ひて

〔朱 大平〕

①故おとゞのおはせましかばとのたまひて

美云、御祖父君ハコトニ御孫ノ寵愛ハ甚ダシキモノナレバ也。又云、大将ノ人品ヨキ孝心ノ意モコモルベキカ。

〔美石〕

②△たへずは△印は朱

〔朱 大平〕

〔40才〕

①めざましは、軽き分際にて分に応ぜずふるまふを見ていふ事也。きりつぼノ巻、めざましき物に、玉小ぐしにさ〔虫損〕あるまじき事と思ひていきどほれる意の詞なりとあり。

〔朱 大平〕

②おくせりは、博士どもの作法をいひたてゝとがめがほなる事といへども也。

〔朱 大平〕

〔41才〕

①廃れたるを起し、埋れたるを尋ねて、大学寮の作法、又博士をも挙用ひ給ふ

〔朱 大平〕

②御政申し給ふに

〔朱 大平〕

③ひがこと也

〔朱 大平〕